



『談別冊 shikohin world 酒』(TASC 06年3月27日発行)より

浴びるほど飲む人はどこにでもいる——酔いたい、酔うために飲む飲兵衛の存在

遠藤哲夫

この原稿は、2005年末の忘年会シーズンがたけなわというところに書いてある。

そう、日本には、「忘年会シーズン」というものが明白に存在する。そして忘年会といえば、過ぎ去った一年を静かにシミシミふりかえる、なんてものではなく、複数あるいは大勢でオシャベリしながら二日酔いになるほど飲むのである。

日ごろは「忘年会予約受付中」といった大衆的ポスターなど貼つてないオシャレなカフェバーも貸切になり、往来には酔っぱらいの集団がウヨウヨし、電車は終電まで酒臭い男女で朝のラッシュ並みに混み、その混雑のあちこちには嘔吐の溜まりがあり、道路を歩けば、もう一度そのまま食べられそうなラーメンや米粒が吐き出されている。

忘年会シーズンのある日本はイイ、こういう日本が好きだ！私は30歳を2年ばかり過ぎたトシだが、忘年会から朝帰りの電車の中、泥酔の頭で、そう叫びたい衝動にかられる。かりにそうしても、ああ朝から酔っぱらいがわめいていると、人びとは温かい目で見過ごしてくれるだろう。そのように日本も日本人も、寛容であるはずだと、ニヤニヤする。

海外で転々とすごし、現在日本で外国人旅行者をサポートする

仕事を営む人の話では、外国にはそのような忘年会の風習はないらしい。外国人に、忘年会で二日酔いとか言うのと、「一年を忘れるって、どういふことなんだ」って笑われるそう。なんとまあ、つまらない脳ミソであり、味気ない人生ではありませんか。

「酒を飲むは時間の無駄、飲まぬは人生の無駄」という言葉が、この時期、もつとも生き生きと輝く。つまり、飲むことは酔うことであり、酔うことは幸福な人生であるという真実が、隠しようもなく天下に明らかになるのである。年末は「メリークリスマス」より、この言葉をイルミネーションに掲げてほしい。

忘年会は致酔文化の頂点にあつて、日本人の幸せを象徴する文化である。そう私は主張したい。

いま試みに「致酔文化」という言葉を使つてみた。ま、感じとしては悪くないが、辞書を調べたら載っていない。でも、そういう感じの文化、ありますよね、そのヨロ、わかつてもらえますよね。ほら、飲んで、酔いたいですよ。酔いを招くために、飲むですよ。つまり、酒の致酔作用に身をまかせるヨロです。

飲酒は、社交やコミュニケーション、くつろぎや癒し、家族団らん、あるいはおいしい食事、いろいろタテマエやリクツをつけることができる。しかし、現実はどうか。酒を飲む本音は、「酔いたいからだよ」という人は、いくらでもいる。その事実が、ちかごろ無視されていやしないだろうか。

いや、正直いうと、今回この原稿の依頼があるまで、そんなことは考えたことがなかった。私のまわりでは、酒を飲んだら酔っ払うのがあたりまえ、酔うために飲むのであつて、ほどほどに飲んで楽しむなんて、とんでもない。思う存分に酔うほど飲んでこそ楽しい、という、ほどほど知らずばかりである。

ところが本誌の佐藤真編集長は、原稿依頼のメールで、このような趣旨を書いてよこしたのだ。

「若者が酒を飲まなくなつたということをよく耳にします。また、全体的にオシャレな飲酒が好まれ、ダラダラとクタクタ飲む人は少なくなつたとも聞きます。しかし、それは本当なのか。そういう人たちの存在を、社会が単に見ないようにはしているだけではないか。……不寛容化の度合いがますます強くなつてきた現代の日本社会は、飲まずにはいられない人たち(アル中というのではなくて)の排除へ向かいつつある……」

これに対して飲兵衛のアンタは、どう考えるのか、と。

私はおどろいた。私のまわり、行く先々では、みなダラダラクタクタ飲んでる。飲兵衛に対する不寛容なんて、まったくかんじたことがない。若者が「酒を飲まなくなつた」のは、とくに携帯電話やインタ

ーネットのように、かつてはなかったものに金が必要になって、飲み代は慢性不足状態だからだろう。それに、飲酒の時間も場所も分散しているから、むかしほどは目立たないのではないかな。

そもそも飲兵衛に寛容なハズの日本である。駅のホームや構内でも酒を飲ませたり売ったりして、ベンチで簡単に酔って寝られる国なのに、酔っぱらいに不寛容なんて、そんなことありえないでしょう。

しかし言われて、よくよく考えれば、不気味な気配はあった。それは、酔眼で電車に乗っていると目に付いて気になる、酒の広告に小さく印刷された文言だ。

「飲酒は〇歳になってから」に続いて「お酒は楽しく、ほどほどに」といった文句がついているのだ。見るたびに、フン、余計なお節介だ、とおもっていたのだが。私は、いくつかの酒造メーカーを調べてみた。すると、こんなあんばいなのだ。

「ほどよく、楽しく、いいお酒」

「お酒は楽しく適量で」

「健康のため飲み過ぎにご注意ください」

「お酒はおいしく適量を」

「健康のため飲み過ぎにご注意ください」には笑ってしまったが、こういうオコトバが、広告や容器にあるのだ。これは、大量に飲む人が少なくないことのあらわれではあるが、なんというお節介だろう。酒造メーカーが、そのように、誰に対してだか知らないが、媚びなくてはならない事情があるのだろうか。なにか得体の知れないものに、じわじわ真綿で首をしめられるかんじを覚えた。

そんなときたまたま手にした、酒文化研究所編集の『酒と水の話「マザーウオーター」(紀伊国屋書店)に、「酒を愛し、水を愛した作家たちのこと」という石川次郎さんと近藤サトさんの対談があった。

そこで近藤さんは、「私は、野坂昭如さんのこういう言い方に共感を感じるんです」と『酒歴二十数年の弁』から「むきになって酒を飲む人間は、むきになって生きている人である。クールとか、洒落たとかいう、はすにかまえた生き方もいいけれど、少しはむきになる面があってもよろしいのではないか」を引用している。

そして近藤さんは、「このように言う。「野坂さんはだいぶ前にこれを書いているんですが、むきになって飲んでる人って最近はずます見かけないでしょうか? むきになって生きようとする人が減っているんだとしたら、ちよつと寂しいですよね」

このへんはいろいろ異論のあるところだろうが、私は、次のこの発言におどろいた。

「今の時代は、酒に溺れるとカッコ良くないどころか信用を失うと

思うんです。それくらい社会はスマートじゃないものにたいして不寛容になってきている」

ふーむ、そうか、自分は飲兵衛だけに囲まれて過ごしてきたから幸せで気がつかなかったが、世の中たいへんなことになっているのだなあ。

私の若い酒飲み友だちが、朝出勤したら、職場の上司に「おまえ酒臭いから、これを飲んでおけ」とコンビニで売っているモノを渡されたという話を思い出した。コンビニには、私は利用したことはないが、二日酔いに効果のあるサプリメントもあるらしいし、そういう臭い消しモノが売っているということは、いかに飲む人間がいるかの証明でもあるのだろうが、また不寛容が拡がりつつある状態を示しているのかも知れない。

一月は正月で酒を飲み、二月は豆まきで酒を飲み、三月はひな祭り酒を飲み、四月となれば花見で酒を飲む。たしかそんなかんじの「酒が飲める飲めるぞ〜 酒が飲めるぞ〜」というような歌もあったとおもうが。そのうえ、浦和レッズが勝ったと飲み、巨人が負けたザマアミロと飲み、暑いからと飲み寒いからと飲み、とくに何も無い日は、とにかく今日も一日ご苦労さんと飲む。

酒を飲む本人がイチバンよくわかっている。なにか大義名分、というほどのものではなくても、リクツがあつたほうが、飲みやすいだけではなく、気分よく酔いやすいのである。なんでもいい、リクツをつけて飲み始めれば、こっちのもの。

「酒が飲めるぞ〜」はイコール「酔えるぞ〜」「酔うぞ〜」というコトなのだ。そのなかでも、忘年会は、あれこれリクツをつけて飲んでいた一年を、酒を飲んで忘れようというのだから、これはもう致酔行事の最高峰というわけである。

先日、知人の女性が参加した忘年会は、ある会社のサービスタッフたち約30人ほどが集まったとのことだが、年輩の一人が挨拶で、「俺たちは貧乏だ。そう、貧乏なんだけど、酒が飲みたい〜」なんて感じで意味不明の話をし、彼女は、なんかちよつと泣けたという。

現場の仕事を支えるサービスタッフというのは、むかし風に言えば「日雇い」「臨時」の労働者、いま風にいえば「派遣」「契約」または「フリーター」と呼ばれる労働者である。ズバリ言えば「下層労働者」。社員と同じ職場で同じ労働をしながら、収入は社員の何分の一という人たち。社員より、そういう人たちの比率が高い会社は、いまやフツウになりつつある。そこでは、酒を飲んで酔いたいリクツは、いくらでも見つかる。

いや、だからといって、誤解しないで欲しい。恨みや愚痴じゃなく、むきになって生き、むきになって酒を飲む人たちの、けなげな励まし

あい、連帯あるいは友情なのである。

都心の、誰でも知っている大会社の華やかな職場で働く彼らの忘年会は、どこにもある大衆的な居酒屋チェーン店が会場だった。そこで「時間も、飲みまくったとのことである。そして、彼女は、やはり、二日酔いだった。」

その話を聞いて私は、彼らの日常が「俺たちは貧乏だ。そう、貧乏なんだけど、酒が飲みたい〜」なのであり、日ごろから、豊かでオシャレで先進なイメージを粉飾した職場を退出したあとは、そういうところで飲んでいるにちがいないとおもった。

「俺たちは貧乏だ。そう、貧乏なんだけど、酒が飲みたい〜」という人たちは、大勢いる。いや、大衆は昔も今も、そうなのだ。

往來では居酒屋チェーンが、いやがおうでも目に付く。私が利用する京浜東北線北浦和駅、埼玉県庁のある浦和駅の隣の小さな部品のような駅周辺でも、東口に四軒、西口に五軒、駅から素早く見える範囲にある。これらはみな広い店舗面積での営業だが、そのほかにさらに、従来型個人営業の安酒場がたくさんある。これは北浦和に限ったことではなく、こんなにあつて成り立つのか、こんなに酒飲む連中がいるのか、とおもうほどだ。

いまここでいう居酒屋チェーンとは、酒が安く飲めるところであつて、ビール大瓶500円以下はふつう、400円以下もある。生ビール中が450円か、それとも400円を切るか、そのときのグラスのサイズはどうか。その基準は、単にビールの値段だけの問題ではなく、ほかの酒類やつまみ、支払い合計の値段の目安になる。

もちろん料理がまずくてはだめだが、乏しい金で思う存分飲むためには、酒の値段が少しでも安いことがカンジンで、そのわずかな値段の差を覚えていて、ときどきの懐具合を計算しながら店を選ぶ。この私も、そういう一人だが、いじましいほど酒の値段を気にする。「貧乏なんだけど、酒が飲みたい〜」のだ、安く思う存分に飲みたいのだ、安く酔いたいのだ。そういう切実な気持ちに応える酒場が、どこでも苦労せずに見つかる。すごいことだとおもう。

「安く思う存分」を命題にしている人たちが大勢いるのである。そういう大衆の存在は、街角の大衆的な酒場だけではなく、食品スーパーや酒のスーパーで、いくらでも目撃することができる。それらの店頭にならぶチューハイ、サワー、発泡酒、第三のビール、最近流行のホップビーなど「安く思う存分」を命題にした酒の普及は、「貧乏なんだけど、酒が飲みたい〜」大衆の存在をきわだたせるものである。

そして、いま進行中の酒税の改革は、安く酔える酒の存在と、それを必要とする人びとの存在を、「簡単でわかりやすい」税制の体系的なかに埋没させようとしているようである。これは、安い酒の値上げ

にとどまらない、上質のホンモノの酒を適量たのしんで飲みましよう
といいながら、「飲まずにはいられない人たちの排除へ向かいつつある」
動きとして、注目すべきなのかも知れない。

私は、気づいていなかった飲兵衛に対する不寛容を考えているうち
に、個人の幸福より健康を上に乗く社会が気になりだした。

私の理解では、戦後の日本は「福祉国家の建設」つまり国民一人一
人の幸福を基礎にした国家の建設を理念にしてきた。個人の幸福が
第一であり、健康は個人の幸福に包括されるものであり、病気になる
った場合は公的な医療制度が機能する。

ところが、いつのまにか日本は「世界一の金持ち」を目指す人たち
を主人公に見立てる社会へと向った。「福祉」は個人の幸福の追求か
ら「弱者救済」にすりかわり個人の幸福は追放され、かわつて公共が
直接的に健康に介入するようになり、医療は自己責任へ転嫁。

この過程で、タバコは嫌煙権という市民運動の衣をかぶつて、個人
の幸福から公共の場に引きずりだされリンチされ、食生活は健康と
栄養に矮小化されたうえ、食育基本法により国が介入し個人の幸
福から切り離されようとしている。

幸福は個人に属し、健康は幸福に属するはずだろうが、健康こそ
幸福のもとであると逆立ちした錦の御旗が掲げられ、公共が個人に
干渉する動きは、あのバブルの最中から顕著になった。

そこで思い起こすのだが、1985年に刊行され話題になり89年に朝
日文庫になった小沢雅子さんの『新・階層消費の時代』が指摘した、
「資産所得者」と「勤労所得者」の格差拡大である。

貧しい勤労所得者がメジャーな存在であったときは、個人の幸福
は必然だった。しかし、富裕な資産所得者がメジャーな存在となれ
ば、勤労所得者は健康なロボットとして機能していればよいのである。
そのための管理こそが公共の役割になる。

いま健康な勤労所得者とは、若いときから資産所得者になるべく
志向する人たちである。疑問をもたずに用意された嗜好や食べ物に
したがって働き消費し税を納める人たちである。この継続により、資産
所得者が利得を得る市場という賭博場は維持される。その賭博場
が人気であれば、税収もガツポガツポである。

酒やタバコなどに金を遣うより情報やキャリア、あるいは株に金を
遣い、資産所得者になるべく頑張りなさい、それで成功し金さえ手
にすれば、うまい酒も美人も幸せもおもいのまま。これは「上」からの
お説教ではなく、状況になった。

「世界一の金持ちになろう」この考えが個人のものであるうちは、
それはそれで一つの幸福追求のありかたであろうが、社会の制度や
仕組みとなると話しはちがつてくる。

こうして不寛容な殺伐とした社会が到来し、「二通りの健康」というコトバが流行ったのであるが、それは、幸福を失った健康の姿にほかならない。

いまや飲酒は、このように小さな親切大きなお節介に管理された健康のもとに組み込まれようとしているのだろうか。

日々の幸せを願ひ、「貧乏なんだけど、酒が飲みたい」とむきになって生き、むきになって飲んでいるひとは、いくらでもいる。そこでは酒を飲むことは、生き方であり、生活である。酒は嗜好品かも知れないが、飲酒は生活なのだ。

そういう飲み方を、即物的で安っぽく、非文化的でオシャレじゃない、カッコ悪いものと決めつけ、ふたをして見えないようにする傾向があるのも確かだろう。それについて、私は、気になることがある。それで、あえて最初に「致酔文化」という言葉をつかつてみたのだが。

「酒は酔うために飲むもので、うまい、まずは二の次だった」というふうに、日本の飲酒の特徴を説明する文章をよくみかける。致酔飲料としての酒の利用は即物的で、文化的には低次元のものであるという考え方だ。この場合の飲酒は、とうぜん、大衆が愛顧してきた安く酔う飲酒をさしているだろう。言いかえれば、日本の大衆は「酒は酔うために飲み、うまい、まずは二の次だった」ということである。こういう見方は、酒にかぎらず食文化を語るときに見受けられる。大衆の日常の食事は、腹を満たすためのもので、うまいまずは二の次で、料理や文化といえるものじゃない、という考え方と共通する。しかし、それは実態ではない。

たとえば、チューハイやサワーのたぐい、ようするに甲類焼酎という安酒を、何かで割るか味付けして飲む方法だが。なるほど、これは「低級」の飲み方かもしれないが、「うまい、まずは二の次」という飲み方ではない。

東京の下町の酒場を中心に普及した「ホイッス」「ハイボールの素」「梅酔」「ホッピー」などが昔からあって、これらの液体飲料は、安いがまずい甲類焼酎を、どううまく飲むかという工夫だった。あるものをうまく飲む工夫である。

東京の下町で、安いがゆえに絶対的人気を誇ってきた某甲類焼酎について、それを愛好してきた人たちには、あれはそのままじゃとてもまずくて飲めないという人が多い。そして、そういう液体を注いで飲み、愛好してきたのである。決して、うまいまずは二の次ではない。味を知らないわけじゃない。

また、即物的な飲酒の場のようにおもわれてきた大衆酒場や立ち飲み屋だが、最近では、安く酔うための結果である独特の人情や雰囲気やマナー、あるいはツマミなどが、魅力的なものとして注目され、

ブームになっている。

ようするに、大衆のあいだには、「あるものをおいしく」という文化が脈脈と息づいているのだ。それは日々の生活に幸せを願う大衆の文化であるし、その生活から健康とひきかえに幸福が奪われつつある状況を考えれば、致酔文化の評価こそ必要だろう。

うまい上質の酒が、もっと必要なのは確かである。しかし、それが健康をタテマに、適量をたしなむ正しい飲酒として用意され推奨され、致酔文化の軽蔑や無視につながるとしたら、不幸の上塗りになる。

浴びるほど飲むひとのためにこそ、安くてうまい上質の酒が、もっと必要なのだ。そういう酒が、おおらかな社会や人びとの幸福な人生のために必要だし、大衆に支持されるでしょう。

タバコは吸わないが、酒は中学生のときから飲み続けている私、一人の飲兵衛から言わせてもらえば、そういうことです。

